

領域經濟における封鎖性と開放性 (上)

富山売薬行商圏の歴史地理的条件を中心として

植 村 元 覚

第一節 序

幕末期、全國經濟の段階において我が國の經濟地理は著しい特色をもつていた。

そこでは米や諸國の名産の全國的流通の間にあつて、大名は自己の領地に強大な領主權を認められて、これに基く藩制がその上に成立する領地を地域とした領域經濟が成立しており、領主はその支配者であり領域經濟政策の主体であつた。江戸中期には周知のように城下町の上昇してきた消費經濟を中心にして他國物を取扱う商人が各地に増加し活潑化した⁽¹⁾が、これとともにまた数多く入りこんでくる他國商人及びその商業資本に対する領地的排他主義がみられ、金銀正貨の保有増加、殖産勸業が進められた。幕末期にはそれは財政收入を計る藩營主義的傾向を強化するようになり、また城下町商人に対して在方の商人が上昇した。尤も藥種のみは「在々迄も無之候ては不明叶」として長州藩の様に從來の取引が其儘に残されたところもあつた。

領地は歴史の各時代においてそれぞれ地域性をもちながら絶えず変化しつつある姿を示したが外延的には西南先進地帯では小商品生産の發達によつて城下町の外に農村の商品流通の進展が進み、他領域との商品移動が活潑化して開放的傾向を示すと共に正貨の流出、物価の騰貴、財政の窮乏化を防ぐための津留の乃至は関税による輸出入の制限等によつて領域經濟を結果的に守らんとする封鎖的傾向を内包しながら積極化した。東北日本はおくれてこの

植村・領域經濟における封鎖性と開放性

經濟的生活圏の中に入つてきた。

領域經濟はかくてその中に先進、後進の差或いは地域性を示しつつ江戸、大阪へのルートを利用することによつて全國的な商品流通の大なる地理的⁽²⁾利益を享受することができるようになつた。

富山売薬商人が昆布船を蝦夷から薩摩に廻送したのもこの歴史的地理的表現であり、それは他領域において、特權的城下町商人、領主的商品經濟の進展、農村の小商品市場に対応しながら、自自行商地域を選択し開拓したものであつた。田舎町や農村地区に市場を求めて入つた売薬人がその一部も多くの場合一万斤⁽³⁾を領内營業冥加のため藩に献納して外来商人として營業の保全を計り、他は商品化するものであつた。

そしてこの諸領地には幕末の改革という時代的轉換による機會は恰もその政治的強固さを加えた時、領主經濟の發展は藩内保護或いは統一が一層推進した。領域の他領域に対する緊張の意識は全國經濟の進展に対応して成育し、拡大した。この点について中世末ヨーロッパの商品經濟の進展の劃期的時代を示した十四、五世紀についてアンリ・ピレンヌが、「領内保護の徴候は十五世紀に至つて始めて現われるに至つたものである。それ以前においては自國の貿易を外國の競争から保護して特惠しようとする考えは全然見られなかつた。」と記述するのは幕末の經濟地理を問題にする際に注意されていい態度のようである。

右のような地域的構造をもつ幕末期において全國的行商を営む約二千人の

富山売薬人が諸領域において、諸商人との対立、特に領主的規制、差留など藩権力の対応に処して行商圏の維持に努めた。本稿ではそこにおけるこれらの諸関係を明らかにすることによって領域経済のありかたの一端としてその封鎖性と解放性を理解しようとするものである。ただこれを幕末という歴史の時代に直交する時間的断面において考察し、歴史経済地理的立場とくにその商業地理の傾向において、従つて商品移動とその両極をなす仕入地、販売地が研究の対象になるが、ここでは旅先行商地の領域経済を時代の歴史的社会的条件に相応じたものにおいて考察せんとするものである。

(1) 拙稿「地理学における原理について」(富大経済論集、第四号)

(2) 富山売薬業史料集七五頁、以下特記しないで頁数のみを掲げるものはすべてこれによる。嘉永六年富山売薬人仲間より鹿兒島の木村与兵衛宛書簡に「菅福丸松蔵義昆布昨年の通り申付、六月上旬松前表へ出帆為致申候間、御表江相廻り申候節は献納向并余分等も毎歳通り不相替宜御取扱成下度偏に奉願上候……」

(3) 例えばカート・レヴィン著、末永俊郎訳社会的葛藤の解決、(昭和二十九年)を参照、レヴィンは場の理論をトポロジーとして自由運動空間、生活空間及び領域について社会学的に展開する。

(4) アンリ・ピレンヌ著、増田四郎外訳、中世ヨーロッパ経済史(昭和三十一年)一一三頁「十三世紀末までの商業にあつてはあらゆる方面において商人は巡礼と同じくその通過する土地の領主の特別の保護を受けていたが……これまでは各国とも商業活動に対して統制を加えようとはしなかつた。いわゆる経済政策の名に値するものは求めようとしても得られないのであつた。」

(5) この用語はまだ一般化していないようであるが、最近藤岡謙二郎教授は新地理学講座第七巻歴史地理の「歴史地理の課題と研究」において歴史地理は将来この方面の研究の進むにつれて歴史人口地理、歴史交通地理、歴史経済地理などに分化されるべき性質のものとされるその一部門に当るものである。

(6) 木地節郎、商業地理概論、四三頁

第二節 旅先領内における行商圏の成立条件

I 免許—外来商人としての行商地域の獲得

(1) 他領における行商地域——行商のためには藩から仲間組に与えられる許可の鑑札又は免許を獲得することが必要であり、これによつて商人は領内の住民に擬制されて株きめがなされた。そして領内の行商者人数、売薬品名、製薬法及び行商地域、営業期間が定められると共に寄留証が要請せられ滞在中は仮檀那寺を定め、ここから人別帳の届出が行われた。領内滞留中の宿所の指定は、仲間組自体においても毎年固定してそれ以外の宿泊が禁ぜられて厳重に規制された。行商人は国許でもその人員は仲間組として同時に規制をうけるものであり、場所先毎にその町村名を記して人名が明示せられた。

外来商人としてとくに注意されるのは免許された預内での行商地域の規制であつた。領内免許は更に分れて第二次的に町役所と郡中免許に区分けせられ、実際上の行商地域はこれによつて決定或いは獲得せられた。例えば「小倉記録」には弘化の頃「小倉郡中売薬免許名面」として郡内の富山売薬人の人名と売薬名が記載されており、村方を中心とする行商地域の具体的場所が明示された。思うに郡については明治以前の状態を担当に明白に示す日本地誌提要によるまでもなく、一或いは二の町があるのが多く、それが交通、商業の中心をなして地域を結晶化する拠点をなしていた。個々の売薬人の行商圏は徒歩を交通手段におく限り、定宿から一日の行動半径の範囲に当り、一年に春秋二期に行商する彼らは一回に定宿を数回移動しながら行商するのが常例であつたので、一期の行商圏はこれに応じて形成された。小倉領では安政頃の業者の控帳である「永代簿」によれば売薬人十一人について小倉城下三人脚、山浦一人脚、企救郡一人脚、大橋二人脚、推田、上毛二人脚、田川二人脚であつた。日向領では薩摩藩より富山売薬人に免許された「日州一円御免被仰付候郷数」は吉田、馬関田、加久藤、飯野、又四ヶ郷。一、小林、高原、高崎、須木、野尻、高城、山之口、勝岡、都、城、メ九ヶ郷。一、志布子、松山、大崎、メ三ヶ郷惣メ十六ヶ郷、外に関外一、高岡、倉岡、綾、穆佐メ四ヶ郷。計二十ヶ郷であつた。かくてその行商圏は村々を包含する上位組織として郡または郷か、或いはせいせい数郡にわたる地域に波及することになるが、それはいくつかの地域集団に分れ、インターリーヴョナルなも

のであつた。郡は商品流通においても原初的な都鄙共同圏的性格を具備したのである。郡内に数個の町が存在するならば、これらを中心とする小共同圏を副圏として包含し、自らは主圏となることもあつたであらう。⁽¹⁹⁾ 売薬商人の個別行商圏は空間的制限内で最もスムーズに行われるとしてもこの空間はこのような一定のテリトリーを限り郡内で共同の商圏をもつ傾向にあつた。

このようにして領内の行商人分布は町方と村方とに分けてみることができ、慶応三年熊本藩行富山売薬人場所先並人名簿に記載された資料では行商人三十人脚のうち城下町とその周辺は六人でその他の二十二脚は松橋、松合、小川、宮原など近在の町や農村地区であつた。鹿兒島藩ではその行商人名は二十六人脚のうちその城下町を専業としたのは一人のみであり、同じ傾向は文久三年阿部弥一郎の大阪附近の行商日数についても貫かれていた。夏廻三十日、秋廻八九日計一一九日のうち大阪町、平野町は合計十七日その他は淀在、松原などが一〇二日であつた。⁽¹³⁾ これらに廻には「銘」廻の郷書上御付状申請候上夫、徘徊可申候事」とされ旅藩にて提出された。

行商地域は経済的には特権的城下町よりも農民的商品市場の農村地区が利に賢い外来の彼らによつて選択され藩の指定の下に営業を行つた。しかし領域経済の政治的中心地は城下町にあり、行商人の領内行商もこれを政治的拠点として周辺に及ぶものであり、廻在には薩藩では「彼地鹿兒島表旅人方町年寄衆より、六ヶ外城切廻在の付状申受、外城之罷越可申御国法にて、向寄外城々々の御役方にて次書申請、六ヶ外城廻在終候節は早速鹿兒島表江罷出、付状可致返上候」とされた。

(口) 免許の内容―品名とその数とが限定せられると共に時に秘事口伝とされる製薬法が旅先藩に調査され、また報告せしめられた。安政年間小倉領内では藩当局から如神丸、保寿丸、養臟丸などの薬法について製造過程、原料費などを提出した。免許されれば当然に冥加金の土納が義務づけられた。例えば文化頃熊本では夫々「年々株銀として六貫目宛指出」とされた。営業が終了すれば直ちに藩に帰国手続きをすることとされた。これは近江商人が行商先に定着するという発展傾向を示したのと異なり、営業の様式は時代とともに

植村・領域経済における封鎖性と開放性

に変化したが行商に終止するものであつた。免札の有効期間は一年限りであり、営業継続のためには配薬年継を藩商人の側から向寄を通じてなされた。しかしその許可が困難視され差留の危険が予想されるとき、或いは懸場を新規に買入れる旅先藩との交渉に困惑する場合には富山奉行所に依頼し、奉行所が代つてその継続許可をうけるように努力した。⁽²¹⁾

(1) ここに外来商人とは他領の出身者であつても近江商人のように旅先に定着してその活動が機能上においても性格的にも領内の商人であつた者も除く。この点については作道洋太郎「近世貨幣資本と大阪商人資本」阪大経済学、昭和三〇年八月号参照。

(2) 史料集八二四頁

(3) 同八七一頁

(4) 同八五三頁、「御達并諸控帳」によれば文化十四年熊本藩内御国人を許されたとき「滞留中は九十郎方江宿付いたし候様、右の通可有御申聞……」と宿所を規定された。

(5) 同一一六五頁、例えば安政五年、富山売薬人五名より東西蝦夷地行売薬に助人六人の新足を願出た富山町肝煎宛の書状。

(6) 同九四〇頁

(7) 同九七一頁

(8) 同一〇七五頁

(9) 同六八五頁

(10) 水津一朗、「共同体の地理的規模」、史林、昭和三十年十一月

(11) 史料集九三九頁

(12) 同六三五―九頁

(13) 同二九六頁(14) 同三五五頁

(15) 外国では開拓期のアメリカに類似の例がみられる。印刷物と売薬との二種の行商人がいて農村地区に重要な役割を果たした。印刷物は書物、パンフレット、聖書、曆新しい読物などであつて開拓地の村々に行商人の包や車もたらした初期の文化であり、売薬行商人は日常に必要な薬であつた。しかし後者は結局長期間にわたつて下剤やリユーマチの薬や整髪剤を売る荷車を巡回さす大商會にとつて代られた。

N. S. B. Gras: Business and Capitalism, An Introduction to Business History.

P.47 拙訳「経営史」七〇頁（三十一年一月刊）

(16) 史料集六三四頁

(17) 熊本領は十二品（史料集）八九二頁、小倉領は二十五品（九一五頁）であつた。

(18) 同二〇一一頁

(19) 同八五三頁

(20) 同六三五頁

(21) 同二一八八頁

II 他国商人との行商地域の対抗関係

旅先領域内には、城下町や周囲の農村地区に定住商人の薬種屋、合薬屋などの薬屋があるほか、勢国から売薬商人が入りこんでいた。城下町では株仲間を形成する特権的な薬種屋があつて問屋的経営を営んでいたが、新興の小商品生産市場である農村に行商を希望し、更にここには外来の富山売薬人や大和売薬人、田代売薬人、近江日野商人、越後商人、（長門）伊佐薬屋、加賀領域中の売薬人、時には領内の売薬人（例えば豊後では櫛田村の売薬人）が行商していた。嘉永二年熊本領内の売薬免許をうけた他所売薬人の名簿は越中富山八名、江州日野二名、江戸一名、宇佐一名対州田代二十七名をあげている。

富山売薬商人は仲間組において重置を禁止して組内部相互の利益を保護したが、他国商人との間では団体的緊張を高め、領域意識的な対抗関係を成熟せしめた。旅先領内商人とも同様で文久三年豊前築城郡推田村の売薬人八名から藩への上書に「私儀是迄御領中売薬御免被仰付居候処……富山権七義は製薬仕入等も手厚く、殊に多人数罷下り、村端に至迄家別夥敷入薬仕居候……旅方売薬の者一切御差留に相成候に付而は私共製薬追々売方も相増御領内同職の者一位難有……御領内の者斗江売薬被仰付候様御願申上候」と領内商人の市場独占を願ひでた。このようにして領内及び外来の諸商人の対立をうけたがその基本関係は次の四つの形で示された。

(イ) 協定—富山売薬人は「諸国商人江対無礼我儘無之様、随分柔和に附合

「うべきことが多くの仲間示談に示された。注意されるのは大和売薬人との関係であり、各地を行商した大和売薬人に対して旅先領内においては商業協定を締結して販売利益の保護を相互に確保し合うこととした。慶応二年大和薬屋中との仲間取締議定書印帳によれば相互に値引き、せり売りの禁止、価格の協定、不正薬種毒薬の取扱禁止、行商使用人の賃銀の協定などに及び、領域間にわたる前期的カルテルを結成した。但しあくまで価格の協定を中心にするものであつて、仲間組示談書の常に厳守を強調する重置については規制しないままに自由に残されていた。

(ロ) 競願—領内市場獲得を藩に競願して対立した。九州で互に競争した田代売薬との場合小倉藩では嘉永元年以来、外来の売薬は差留となつたが、安政三年千五百両献納による田代の献占的市場獲得や文久二年差留の原因であつた小倉製薬方の引受経営の断合更には富山売薬人以外の入口を禁じた薩州での免許の内願など甚だ積極的であつた。富山売薬人はこれに対抗して熊本藩では「田代之売薬人御免の外多数御国へ被入込候に付」その入込に関する口上書を藩に提出して遂にその入込者の調査を申付けられるなど互に著しく対立した。

(ハ) 公権力利用による対抗—経済原則に基づく市場支配のほかに藩の権力構造を利用する対抗策がとられた。これには数国の行商人が協同して他を排除するのと、特定地の商人のみを排撃する場合とがあつた。嘉永五年の杵築郡所よりの御触に富山薬種屋四郎右衛門は、対州倉屋茂右衛門、櫛海村弥右衛門と三人で「敷売薬他所より入込節薬并荷物差押」を許されたのは前者の例であり、加賀領売薬人の入付に対し、熊本領内及び福井領内で、その取締方を申し出たのが後者の場合であつた。

(ニ) 公権力の独占的作用—領域市場を一層確保し経済的ドミナントンを確保するために藩の権力構造に入りこみ、売薬調理方を申付けられた場合である。小倉町役所の天保、弘化頃の御触に売薬弘方の儀は富山薬種屋権七に免許し「その外の分売方停止……」とされまた企救郡外五郡の大庄屋、小庄屋宛にも「宿村共行懸次第宿を貸……薬望の者は無疑相調……」とされ

営業は独占化し、絶対的有利な条件を有してここに領域経済についてドミナントンが成立した。

III 行商人の領域的規制

富山売薬業の人的構成は旅先領のそれとの交流を封鎖することを原則とし、旅先での連人を雇庸したり又雇われたりするの禁⁽²⁰⁾。株仲間の人的統制に較べれば属領域的制約が甚だ強固であつた。これは営業日数にも顕現し、行商日数が長ければ売上従つて旅先よりの正貨 出もそれだけ大となり、差留される危険があるので、仲間示談帳に「彼之表に趣意なく数日致逗留⁽²¹⁾」ことは禁ぜられまた両替も目立たざるようにし一家にては不仕⁽²²⁾……又多勢に相見得不申様にと成だけ忍やかに相廻る⁽²¹⁾ように心掛けた。

ことに領域内産業保護の觀念が濃化すれば富山売薬人は献金献納政策によつてこれを突破しようとした。外来の行商人でありながら領域内の免許を確保するためにはそれは宜敷品であつたと共に、藩当局への御役金の外に領域内に入る毎に役筋への種々の献上物その他臨時の献金⁽²³⁾更に市場確保の手段として社寺への寄進⁽²⁴⁾、得意先への簡単な土産物、贈物が頻繁に繰返されたことなど藩権力、役筋、顧客に対する配慮は常々注意深く扱われた。

更に他方、強大な権力構造に対しては、この中に關係を求めるために有力な在住者と着実な連絡をもつこととした。これを商人の代理人として藩権力と交渉せしめ又藩の達しを受け、双方の仲介人たらしめた。鹿兒島では製薬掛下町年寄木村がこれに当り、同町奉行よりその手先の名目で町方や村役人に入付の旨が達せられた。売薬株は木村付属に仰せつけられ⁽²⁵⁾、この結果、関外四ヶ郷の入付についても製薬方より村年寄に「其許郷」都合向の儀共何卒無手抜可取計候、此段申達候⁽²⁶⁾と優遇された。

熊本藩でも財津九十郎、同熊三郎が同じ役割を果たした。その家柄は「富山売薬人共数十年私方へ罷下り、祖父代迄は御勘定所御用達被仰付置、身代も相応に仕居……私代に至り候ては弥以難渋に罷成、富山売薬人三十人内外半年余滞留しその旅籠料⁽²⁷⁾」を得、また入付毎に贈物をうけた。売薬人に代つて

植村・領域経済における封鎖性と開放性

或いは共同で免許願⁽²⁸⁾、その増加願⁽²⁹⁾、連人増願を、また無株の行商人の取締方を願⁽³⁰⁾いて、時には冥加金や献上品の仲介をなした。なおこの仲介機関は中小の諸藩や東北方面では殆んど設置せられなかつた。

(1) 藩領域内の城下町、農村地区の薬屋の分布については、広島薬業史の資料から計算すれば文化四年広島城下では株薬種屋(問屋形態をもち株仲間を結成した特権的薬種屋で他国商人と取引の自由、藩内業者への供給権を掌握していた)は十四名、合薬屋(小売の比較的零細な売薬店で株きめはない)は十三名であつたのに対し、郡中では合薬屋のみで四十八名であつた。ただ郡中にも「後年株薬種屋を免許されし事実あるも其年代詳ならず」としている。農民的商品市場の展開に応じて成立したものと推察される。広島薬業史一七—二〇頁

(2) 例えば嘉永三年「大州城下に罷在候薬種屋四軒のもの共より売薬廻在願出候」の件、史料集二二八頁

(3) 広正会所蔵「御達写并諸控帳」第七十六丁

(4) 拙稿、近世行商人仲間における独占(富山紀要経済学部論集、昭和三十年十一月)

(5) 史料集、一一一二頁

(6) 例えば安政五年越後組仲間示談書、同二六九頁

(7) 同一九七一頁

(8) 前掲拙稿

(9) 同九八一頁

(10) 同二〇二七頁

(11) 同二〇九頁

(12) 同六四八頁

(13) 同八七二頁

(14) 同二二四頁

(15) 同九〇六頁

(16) 同二二五頁

(17) 同九六二頁

(18) 同九六九頁

(19) 同九六〇頁

富山大学紀要 経済学部論集

- (20) 同一四六頁、文化七年富山町奉行より反魂丹上納への達
- (21) 宮本又次博士、日本近世問屋制の研究、三五八頁
- (22) 天保七年安芸向寄示談帳
- (23) 同三五七頁及び四八四頁
- (24) 同二二八頁
- (25) 例えは秋月領では富山売薬人室屋鶴松は文久三年七拾両の運上を納めた。同三〇三頁
- (26) 嘉永二年薩藩には「綿七八万斤、極上の熊鷹二番、白越後三反、上通奈良晒十疋、米沢織二疋」など各地の産物を献上、また役筋にもこれに類する夫々「莫大な献上物」を行商毎に納めた。同六五五頁
- (27) 小倉領内に行商する富山売薬人弥三郎は安政二年には、江戸表大地震による小倉屋敷破損につき献木料を、その前年には「異国船渡来に付御物入に付五拾両献金」という風に屢々臨時的に献上した。同二〇〇六頁
- (28) 薬種屋権七は小倉領内宮尾社に石の鳥居を寄進し、弘化年中之を修繕した。二〇頁。また薩摩領内では富山売薬人は神農堂へ毎年銀十枚寄進した、同八三六頁
- (29) 扇子、箸、針、風船等同二二八頁、同二九三頁
- (30) 同六七八頁
- (31) 同二七三頁
- (32) 同七一八頁
- (33) 同七〇九頁
- (34) 同九一〇頁
- (35) 同八五〇頁
- (36) 同八六八頁
- (37) 同八七三頁
- (38) 同八七五頁

第三節 行商圏における領主の対応策と行商人の態度

藩の領地は統一地域の典型である。統一地域とはその地域のなかに中心となる組織体があつてその統制、支配、サービス、吸引力(需要)影響によつてその周縁の地方が統一される機能的、動態的な同質性に基いて成立する地域

である。領地は多少とも地域的に分化した城下町の商業地、武家屋敷や周囲の農村地区から成立するが、ここに領地に基く夫々独立の領域経済が営まれた。しかもそれは加封転封があり、広狭、土地利用の差があつて、複雑した所領の性格を示すものであつた。⁽¹⁾これが富山売薬人の領内入付という商品の他領域からの移動即ち空間的地域的な拡がりの構造との関係が発生してきた場合、領主権に基く領域内営業の免許或はその差留または求償的交易などの対応形態をとつて現われた。ここではこれら諸領域における差留及びその解除の諸様相の経過を明らかにしようとするものである。

I 差留 留行商圏の封鎖

(イ) 差留の地域性

次の表は富山売薬業史料集に納められた各種の資料例えば御触、達或は仲間組や業者個人の願書、備忘録、書簡などを基礎にをつくつたものである。富山売

年号別差留諸領域の表

宝	秋	田	薩	本	熊	安芸	因伯	津山	薩摩
明	薩	摩	本	本	安芸	因伯	津山	薩摩	
天	滋	本	本	安芸	因伯	津山	薩摩		
寛				安芸	因伯	津山	薩摩		
亨				安芸	因伯	津山	薩摩		
文				安芸	因伯	津山	薩摩		
文				安芸	因伯	津山	薩摩		
天				安芸	因伯	津山	薩摩		
弘				安芸	因伯	津山	薩摩		
嘉				安芸	因伯	津山	薩摩		
安				安芸	因伯	津山	薩摩		
万				安芸	因伯	津山	薩摩		
文				安芸	因伯	津山	薩摩		
元				安芸	因伯	津山	薩摩		
慶				安芸	因伯	津山	薩摩		
明				安芸	因伯	津山	薩摩		
治				安芸	因伯	津山	薩摩		
元				安芸	因伯	津山	薩摩		
年				安芸	因伯	津山	薩摩		

石見、小倉

る。富山売薬業者が旅先藩から営業を禁止せられた事情を示すものである。僅かな残存史料から差留地域について表をつくることは甚

だ危険を含むものであり、単に一面的考察を試みるにすぎない。

これから知られることは、次の通りである。

(1) 時期的には化政以後の件数が大部分を占めていて、幕末期に集中している。

右差留諸領域の地区別表
(数字は回数)

州	国	薩摩	相良
九	四	熊本 2	佐賀, 竹田,
山	山	小倉 2	秋月
山	陽	高松 2	
関	陰	安芸, 長州, 津山 2,	
東	東	石見, 因伯	
北	北	水戸, 秋田	
海	道	仙台, 松前	

弘化年代に件数が多くみられるのは事実多数起つたのであろうが、また「反魂丹上納出納簿」の弘化二年及び三年の資料によるものでそれには差留した旅先諸藩名とそれによる御役金上納の減額が記せられていることもこの表では考慮されねばならない。

(2) 差留した諸藩は地域的には西日本に多く分布し、なかでも九州

が多く、次いで山陽、山陰、東北の順序である。

(3) これら差留諸藩の石高をみるに仙与六十二万石、薩摩六十万石、熊本五十四万石、安芸五十万石、など所領の大きなものが多く、小倉十五万石、秋月は五万石であり僅かにこの例外をなすのは相良竹田の二小藩にすぎない。かくて仙台を除いて西南の雄藩に強度に分布し、しかも薩摩、熊本、安芸などの雄藩はいずれも比較的早く天保以前に差留を断行する傾向があつたことが知られる。

差留の施行地域は藩の全領域にわたるのが原則である。富山売薬人には藩領域に対する仲間組として向寄があり、芸州指留には安芸向寄、また因幡と伯耆の両国では因伯向寄が対象になつた。しかし時にはこの領域的商圏は分割され、鹿児島藩では嘉永年間の差留めの際には薩隅両州を除いて日州のみが翌年解除された。また個人が差留の対象になることも屢々であり、津山では板屋理兵衛外一名、秋月では室屋鶴松が差留となつた。これは多くの場合旅先藩の国法を破つたという理由のためであつた。

なおこれら差留の期間の長さについては、諸藩の公権力自体の発動によるものであり、藩によつて異なり一定の基準はなかつた。その間仲間組、時には富山の藩当局において解除に種々の努力が払われ、秋田藩のように三十五

植村・領域経済における封鎖性と開放性

年の長期にわたる場合は例外であつて奥中国組作州津山向寄では文政六年から五年間熊本藩では文化年間五年間などと五、六年間にわたるものが多かつた。しかし薩州では天明七年から十三年間また文政九年から六年間そして嘉永二年製薬方設置のため再び指留となつて一年後一部分である日州分のみは御免となるなど数回に及んだ。また芸州では二年間、因伯向寄では一年という短期のものなかにあつた。

領域経済におけるこのような指留は他国の売薬に対しても勿論同様であつて「他所売薬一切御指留」が普通であつた。同じ越中でも加賀藩の領地からの越中三組は仙台藩で嘉永七年から三年間、小倉表では嘉永年間、また田代薬屋や、個人として伊佐内田屋や江州、日野、中井、東広また加賀領小杉の開発外一名などや、薩摩では英彦山山伏、伊勢御炊太夫等同様に差留められた。領域内の売薬人も「不束の儀有之」の場合は豊後櫛海村弥右衛門の入薬差留の場合のように杵築御郡から村々に差留の御触が出たことも同様であつた。なお差留のときは商人のその年の献上物、御役銀その他の献金などは一

切返却となつた。

(口) 差留の理由

領主的商品経済が外来行商人に対して差留をなした理由は種々の要素の組合せによるものであるが、その因子は次の五つに分けて考えることができる。

(1) 他国商人の不正 外来商人の法令違反の多いことは長州藩では「近年抜売人報告捕候者共、大概他国者にて候。」また、広島藩でも備中の免札でもつて藩内に来るなど屢々不正がみられた。富山売薬人のうけた個人的差留の多くはこれに当るものであつて、「先年(天保年間)彼地(津山領)立入……松井屋源兵衛、坂屋理兵衛……右両人不正の義有之、又御差止」となり、また加賀領の売薬人の不正について富山売薬人から取締方の願書には「住人の株を借り御当国へ入込候処、私共早速願出御指留に相成候」と、当然に差留が行われた。

(2) 他国商人間の商圏排除 等しく免許をうけた諸国商人の間にその商圏

(8)

の競合する場合は、運搬費の低減が第一の解決すべき課題であるが、商業競争から優位を獲得するために相手方の指留を藩に申請して領域の独占を企てた。前述の富山売薬人と加賀売薬人の対抗のように常に市場獲得について激烈な闘争が続けられ、他国商人の商圏排除を目標にして差留を招来した。

(3) 領域内産業の保護 領域内の売薬人から競争相手として富山売薬人排除を企て、他国売薬の差留を申請する場合は藩権力は領域内商人の立場を甚だしく有利に保護してすべて差留となるのが例であつた。熊本藩では弘化四年城下の酒屋久左衛門外一名から富山売薬人指留の願出がなされ、津山では文政六年「彼御地薬種屋仲間二十一軒売薬御免願出……依而他国売薬御指留」となりまた大州でも「御城下罷在候薬種屋四軒のもの共より売薬廻在願出……」などの例は甚だ数多いものであつた。

(4) 独占価格の排除 旅先藩から株きめがなされ、或いは永代株が認められて領域内の営業が確定する場合は定住の株仲間と同様にその利潤は独占化する傾向をもつことになり価格は独占価格として高くつり上げられた。この故に売薬を安価にすることが要請され、指留となつた。

富山売薬人のみに入付を許された薩藩において、嘉永元年薩藩の「御手元御製薬直段等格別下直にて御国中御弘方に相成候得共、御指留の沙汰も無御座故安心……」という業者の立場の告白はこれを証明するものであり、やがて当然に嘉永三年指留となつた。薩藩では宝暦以後財政困難をきわめ、天明に消極的ながら財政改革が行われ、諸藩に比べ甚だ早期に富山売薬は差留となつた。天保の改革後財政が救済され、国産薬種の品質改良、販売方法の改善によつて薬種からも漸次利益が生じるようになった。そして嘉永年間には和漢洋の原料を集めて国産の増殖をはかり利益をあげんとしていた時であつた。

(5) 製薬方の発足 差留の理由のうちもつとも直接的でありその数も多く重要な意味をもつのは領主的商品経済の行つた製薬方の設置によるものであつた。最も後の時期に著しく作用した。それは売薬の輸入を防圧し、国産を奨励して輸出を増加し正貨の流出を防ぐとともに前項薩摩製薬方の如く幕末

の騰貴した物価に対し価格引下げをも計り、領域内物資の需給を調節するという時代的意識を強く帯びていた。文久年間の秋月、安政六年の高松、嘉永三年の鹿児島や嘉永年間仙台藩では医学館にて「御製薬被成置御城下薬種屋衆薬売仕候事」の場合や、安政三年の小倉藩の場合にみられる。

小倉藩の差留についてその理由を富山売薬人自らが述べて「莫大成金子持帰、格別の利潤有之様御聴御座候より御製薬御発し方被仰付……紀州様、水戸様、薩州様、仙台様方江利益に相成御積り方を以御発方仰付……」とされ、かくて製薬方の発足は富山売薬の莫大な利潤の獲得を領域内に奪取しそれによる貨流出を防止しようとする領域経済それ自体の課題として重視され、よつて富山売薬御指留となつたのであつた。もともと小倉藩では近隣諸藩が専売制度を樹立していたのにも拘らず、寛政の頃からようやく櫛の栽培を奨励するといふ有様で、大甘の藩政改革を妥協させた藩権力のもと領主の商品経済も、おくれて展開し、他藩の例にならつて製薬方を設置したのであり、差留も他に比べ最も遅い時期になされたのであつた。

(ハ) 差留の影響

旅先領域において営業が停止された場合それは商人には行商圏の滅亡を意味するに等しいものであり、その限りに於いて領域経済の封鎖的傾向が台頭することであつた。ウィヒテの封鎖商業国家論的政策ではないことは勿論であつたけれども、商品移動における領域間交易の減少に外ならなかつた。

(1) 商人の側

営業停止によつて商人は一般的な直接的損害と共に、配置得意の暖簾代を評価した懸帳帳の財産的価値の消滅を意味した。即ち「差留後は場所売券更に引当物に相成不申候。……誠に心痛」のことであり仲間組を通じて対策に奔走した。しかし差留による配置薬の引揚は差留指定の期日より延期することが多く「万留守居等御座候而日限り過ぎ二三日も風呂敷包持歩候」ものでこの名目で行商を伸ばす傾向があり、更に従来配置してきた得意先が一定しているので領域内に「密に入込み商売し」また領域内の者の株を借り、或は養子分となり内々継続するなど消極的に対応した。更に小倉藩内では富山

売薬人の中には勇敢にも

「只今願中解除方の事故に表向差引算用業の義は願中の事故密に御願申上げ候……万一御役所より御無沙汰蒙り候時は、其の時私共兼て申上様神妙に実意を以て数年来売薬の訳柄を申立相敷き申上候而、其の上不可叶候時は丸て難船に合申候と存じ、如何様共取計い申候覚悟致し候」とあり、行商の冒險商人的性格を示して強引に継続したものもあつた。

(2) 富山藩の側

第一の国産として奨励する富山藩では旅先藩に解除方を依頼して保護政策を実施した。差留による藩の直接的損害は仲間組より「御礼金上納延期願が出され御役金の徴収減に現われた。」「反魂丹方上納出納簿」にその一部分が窺われる。その記述する最初の年である弘化元年では収入予定額は千八百九

差留による御役金収納減内訳（弘化元年）

拾三兩三歩・永匁又二分五厘

……水戸御領指留に付御用捨に相成、埒前二十

七匁、連人三十四人の内歩割

拾兩三歩・永拾又一分六厘

……高松御領指留に付御用拾分

拾二兩二歩・永二十三又七分四厘

……長門御領指留に付御用拾分

五 匁

……九州佐賀御領、竹田御領、相良御領指留同断

られる。藩としてはこれに基く増御益金「当座預り」「寛裕講向御内金預り」「遠明波講向御内金預り」更に臨時の徴収、次年度の借上げ「取替金」など附加税的な名目の徴収が多いこと更にこれに關与する業者全体への影響、引いては藩経済への影響を推察すれば国産奨励策上放置しえないものであつた。

(3) 旅先領域の側——特に製薬方の消長について

植村・領域経済における封鎖性と開放性

差留により、領内価格は下落した。即ち行商人は特権的商業の城下町よりは農村地区に比重をおいて行商したが、ここでは仲間組により独占的価格を保持したものが差留によつて解体することになったからである。鹿兒島では嘉永三年富山売薬人は日州のみ解除されたがそれには「日州一円通り御免有之候得共、薬直段の義は御製薬同値に付候様被仰渡、尤直段は二割下げの品も御座候、誠に困入申候」とあり、これは製薬方直段「格別の下直にて國中売弘」の趣旨に一致した。従つて商人の側では販売に困惑したのであつたが逆に領域内住民にとつては差留は歓迎されたものであつた。また当然に領域からの正貨流出現象は消滅した。

しかし製薬方の運営に關しては小倉製薬方の場合、富山売薬人の国許への書状に「先達より田代の者二人製薬方仕事に参り候」とありそしてその経営状態は「何分御上様に被遊候時は十文の物は二文半にて御仕入に相成候得は、随分引合候と申候故、中々其通には相成不申候事故、何れ御試の事故、一二年にて御止め相成候」とも見込まれ、事実「御製薬被遊候に付、色々仕入金に相成」りその一部は豊後日田より民間資本として二千兩借上げてなされたものであつた。そしてその収支決算も「一昨辰年（安政二年）御地御製御発し方被仰付……小倉御製薬一条に付、当時三千兩斗御損亡に相成候由取沙汰有之候」と三千兩斗の赤字である旨を商人側では聞き及んでいた。経営困難となつたのは「御勘定のしらべ嶋村棟殊の外不首尾」がその原因の一つであつた。そして文久二年小倉製薬方御取止めになり翌年富山売薬は解除された。⁵⁴

薩藩の事情については同じく富山商人の書簡に「薩州様二年ばかり御製薬為御試被為遊、莫大な損毛と相成候故、御納得被為在、昨年富山永代御免許被仰付候」とあり嘉永四年「御製薬御方より雇下し」として即ち製薬方の売薬、売方雇人として働いた。仙台藩でも嘉永七年医学館製薬を創められ、城下町薬種屋がこれを売り出すことになり御差留となつた。しかし「御製薬方不行届に付、望人有之候は、讓度相談」もあつたように、御製薬は「其初発は御利益御見留に御座候得共終に不被行届、富山へ在来通御免許被仰付相成

富山大学紀要経済学部論集

申候⁽³⁾」と藩営企業が経営困難に陥り、当初の予想通りにその目的と機能を發揮しないことになり、遂に再び富山売薬の解除が達成されることになった。

(1) 木内信蔵博士・地域論(新地理学講座第二卷)二五七頁、昭和三十年

(2) 喜田貞吉、日本の歴史地理(地理学講座)一一〇頁

(3) 城宝正治教授「富山売薬売券の蒐集率に関する一考察」(富山経済学部論集第六号)

(4) 史料集一九七頁

(5) 同一九四頁

(6) 同七〇三頁

(7) 同九一頁

(8) 同三〇二頁

(9) 同九二頁

(10) 拙稿「近世富山売薬行商の保護政策」(富大経済学部論集、昭和三十一年三月)

(11) 史料集一八六頁

(12) 同八五八頁

(13) 同二三四頁

(14) 同九七頁

(15) 同七四頁

(16) 同八五一頁

(17) 同九六七頁

(18) 同九八一頁

(19) 同九八一頁

(20) 同九五三頁

(21) 同九八五頁

(22) 同六五六頁

(23) 同二二二頁

(24) 同二〇三八頁

(25) 関順也、藩政改革と明治維新、三三三頁

(26) 広島県史、一二三頁

(27) 史料集一九一頁

(28) 史料集一〇五八頁

(29) 国松久弥、商團の問題(新地理学講座、経済地理、第三七節)二五一頁

(30) 史料集九〇五頁、なお熊本藩では既に文化の頃、七百町新田の開墾も他国資本も排撃して領内資本を以て行うこととし、出資者に褒賞の制を設けた。岡崎鴻吉、熊本御城下の町人、二四五頁、及び池浦正春、藩宮新田の典型肥後国七百町新地(未発表稿)参照

(31) 史料集一八六頁

(32) 同二二八頁

(33) 拙稿、近世行商人仲間における独占(前掲、昭和三十年十一月)

(34) 史料集二三五頁

(35) 同二二六頁

(36) 土屋喬雄、封建社会崩壊の研究、四三四頁

(37) 同書、三九五頁

(38) 同二八七頁

(39) 同九七四頁

(40) 同六九三頁なお鹿児島製薬方では領内惣産数六万八千七百軒として有効需要はその一割を見込み、この各戸に配置する必要な売薬品名と数量例えば奇応丸五包、目薬二員、風薬十貼、ワスサフル膏三員等約二十種、それに夫々の定価等を計画的に計算してあつた。史料集七〇四、六頁。

(41) 史料集一九四六頁

(42) 同二〇二頁

(43) 同二〇二頁

(44) 米津三郎、小倉藩文化の変に関する一考察(歴史評論七四号)

(45) 史料集二七二頁

(46) 同二〇五三頁

(47) 同二〇五三頁

(48) 同二〇五八頁

(49) 同二〇二五頁

(50) 反魂丹上納出納簿の勘定科目についての細部の記述は同一ではなく、弘化元年について調査ができるのみである。

- (51) 同一二六八頁
 (52) 拙稿、富山藩の売薬業統制(富大経済学部論集、昭和三十一年六月)
 (53) 史料集六九〇頁
 (54) 同三四頁
 (55) 同一〇二五頁
 (56) 同一〇二七頁
 (57) 同一〇二六頁
 (58) 同二七三頁
 (59) 同一〇四頁
 (60) 同一〇五頁
 (61) 同一〇二一頁
 (62) 同七二三頁
 (63) 同一九六九頁
 (64) 同一〇二〇頁

II 解除の獲得—行商地域の再開

(1) 歴史的慣性 差留の解除には種々の過程があつたが、その成因の一つは差留前から「宜敷品」として相当に広く庶民の需要者の家庭に配置されてきた歴史的伝統であつた。ことに近世では医術や薬物が特権的身分から領民に一般化され、落自身も積極的に奨励し需要が普及したところに売薬は存立したが、その配置制度によつて一定の得意が形成されていた。解除に当つて「以前より合衆売弘方仕来候を却て相止候ては可致難渋候間、別段を以……是迄の通合衆入付御免被仰付候」とせられた由縁である。封建社会では洪水、飢饉、悪疫など絶えない恐怖があり、薬に対する欲求は強かつたが、その有効需要のみこまれる戸数は嘉永三年鹿兒島藩御製薬方の見図りでは全領域について「百軒に拾軒の入付」として六千八百七拾軒が計上された位であつた。

業者からの解除達成の願書も伝統を第一の理由として提出して許可された例が多く、とくに秋田松前など東北の地方には、これは著しい傾向であつた。

植村・領域経済における封鎖性と開放性

た。この場合は最も有力な業者の名の下に手代となつて免許された。松前では富山売薬人長谷屋理兵衛は天保元年「諸国入込候売薬人差留」をうけ解除方を願ひてたが結局「勘七儀は往古より深き御縁引をもつて御免被成置候……右勘七手代分にて入込候義は格別、余の名面にて堅く相成間敷……」として翌年勘七手代として許可された。

(2) 中介機関の利用 藩内の住人で落と売薬商人との交渉に当る仲介機関が領域内における行商圏の拠点となすものであつたことは既述の通りである。雄藩とくに西南諸藩にはこの機関を利用して解除が達成された場合が多く、前記の熊本藩における財津九十郎、同熊三郎は弘化年間領内の売薬人から富山売薬指留願が提出され將に実現しかけたのを両人の尽力で解除に落着せしめ、解除の運動には常に藩当局との交渉に当つた。薩摩では木村与兵衛が当つた。解除の方式はその手先或いは御製薬雇下の名儀において自らの計算で行商が許された。しかし領主的商品経済の甚だ強固な薩藩のような場合は反対に運営のよくない製薬方に実質的な販売人に雇傭されるように落から依頼をうければ、商人側は根強い反対を示しながらもその雇下し労働者になつたこともあつた。

時にはこの役割は社寺によつて果された。仙台では安政に至つて「越中三組九十六人惣代として嘉兵衛と申す者当地(仙台)へ罷越、希町阿波屋喜兵衛取次を以て連坊法運寺江入寺仕り、同寺より添書仕敷願指出候処格別の吟味を以……己前の通配薬御免被成下候……」となつた。小倉では始め藩との交渉はかかる仲介機関によらないで業者から直接行われたが、安政の頃から差留解除には有力な浄教寺浄厳を通じて藩主に願込となつた。幕末期の進むにつれて藩権力の態度が漸次外来商人に対し硬化してきたために有力な媒介者に依ることになつたものである。

(3) 献金 差留解除を達成するには右の二つの過程において、双方に時に多少の差はあるが常に献金が予定されていた。

安政三年小倉より富山売薬人の国許への書状に、田代の者が製薬方の薬製造に雇われてきていての話として「少々金子差上ゝ間、何卒売薬の儀は田代

江御免に相成様にと願上候世……色々示談致見るに金子千五百兩斗差上候得は一二年の所は十五品にて其後は先來通り(三十五品免許を指す)にて他国の売薬は一切御指留に相成事故……」と對抗上千五百兩の献金を促がしてきた。尤も小倉では前記のように文久二年製薬方取止めとなり翌年差留解除されたがこのためには富山売薬人は藩当局に大砲二丁代六百兩及び熊皮など献上し外に町奉行、御郡代、町年寄、郡方小頭など役筋六十六人に夫々献金、進物を贈った。

仙台では前記法運寺の仲介で安政三年に三年ぶりで以前通に解除され、年々医学館に御役金百八拾兩づつ相納める外に」右に付為冥加之金三千兩献金申上度奉願候処、可被召上」こととなった。

薩摩では解除の条件として売薬人に売薬株を買い取らせることを添加した。薩摩行仲間より富山藩への願書に

町年寄木村与兵衛殿種々骨折を以て、彼地の売薬株を引請徘徊御免に相成候得共、私共名前にては御指支の向も在之に付、御当領八尾の者の名目を以立八仕候、然共其節右株代金等莫大の金高、殊に雑用等打嵩候故一同の者難渋仕候、御益金も増方被仰付毎歳金貳百兩余の上納高にて……」などと負担の苦しみを訴えた。また安政二年解除の折も金二百兩、鉛千斤、昆布(松前より売薬人が昆布船を鹿兒島に回送一万斤の外に年々百兩を産物方に献上した。熊本藩でも「連年の売掛四拾貫目余」であるが、文化十四年解除の条件として年々株銀六貫目宛指出すことにされた。

解除を機会に多額の冥加金の上納更に加うるに売薬株の高価な買取価格或いは株銀の支払要求などは藩の政策が直營の製薬方の育成よりは窮乏せる藩財政の貨幣輸入に比重が傾斜したものとみることが出来る。しかし業者はかかる献金その他の負担を通じて敢えて克服して營業権を自らに回復し、零細な各目の商業資本の蓄積の上に封建的權力の差留を根気よく根強く徹回せしめていくことに成功した。

(4) 解除による行商地域の回復の限度と経費の負担

以上のようにして差留解除を勝ち取るのに成功すれば、業者は追加仲間示

談をつくり、互に仲間示談を厳守することを再確認したことに「於旅先取上ケ高過分に言振し候儀尚更相心得急度相慎可申事、など他国者の營業による正貨流出について再び指留にならないように注意した。解除獲得の程度には二つの様式があり、解除以前の狀態に完全に復帰するものと部分的に地域或いは營業の一部についてのみ解除をうけるものとがあつた。前者にあつては解除後は「彼地業種屋同様之振合を以て立入御免」となるもので大多数の場合はこのに属した。

後者については地域的に一部分のみ解除された例は(1)薩州において嘉永三年「御領国内日州の分は御指免候被仰付候……」ものでこれは「全体薩州御領三ヶ国にて百廿四ヶ外城の内、日州関内十六ヶ外城、メ甘ヶ外城の場所にて」しかも御益金は従来通り貳百金余であり業直段は御製薬通りに致すべきものとされ、従つて「取揚高の義は惣体の十歩一にも相当り不申候」ほどのものであつた。残部の薩州、隅州両国は製薬方の供給地域として藩になお留保された。製薬方の營業地域のうち一國に入りこむことに局地的に成功した場合である。(2)は行商地域の強度地帯と目される農村地区が差留となつたが城下町だけが許された場合である。富山近辺の加賀領滑川の者が松江藩に「百五十年來御國參入仕、御城下始御國中致売薬來候処、文(?)年中郷中売薬屋差留被仰出、御城下のみ御免相成候」ことになった。(3)後者の他の例は秋月領の場合である。室屋鶴松は文久元年製薬御免し方に相成り、指留となり、彼地御医者方江相絶り歎願した結果翌年次の条件付で部分的解除をうけた。一、従来の松井屋の名代は指支有之、製薬世話人の名目で二、十ヶ年を限つて立入を許され三、従来の二人足を一人足とすることとされた。そして藩当局より、「運上金は年々役所江相納可申候事」「年限十ヶ年に相定候、依之入金七拾兩隨に受取置候……」の念書を受けた。

指留解除には富山より組の中心的人物が旅先に出かけて交渉しその費用は組の費用において計算された。例えば鹿兒島で文政十年差止めとなり二年後御免になつたが、その運動費は千三百八十九兩余に達し、この経費は「人割賦高に應じて徴収されたが、一人足当り平均五拾貳三兩となり、この金額

は、若干年の表向きの持参金にも等しいものとされた。

(5) 製薬方の買取計画

差留の解除のみでなく、更に進んでは商人は旅先藩の製薬方の経営状態の不振につけこんでこれを買収せんと働きかけた。仙台藩では医学館の「御用達捨人の者共之御製薬方被仰付、右の者共御製薬取行居候……安政三年八月己前の返配薬御免被成下候に付、御用達捨人の内より相談仕り候には、医学館御製薬不行届に付右御製薬方買入有之候と相縫り申度相談に及候」ここにおいて「医学館学頭并縫り役人衆御承知の上、千五百両にて買取規定取替候而配薬仕候義に御座候と申上候……買取不申候節は、京大阪の者にても望入有之候ものへ相縫可申由……売薬の義は越中産物に候へば、他国の者江被買取候ては越中の御益に相成不申」と申入れ京大阪の商人の進出を考慮して買取を計画する積極策を以て臨んだ。

(1) 中泉哲俊、近世諸藩の医学教育（弘前大学人文社会、一九五一年第二号）

(2) 嘉永三年薩摩より領内売薬に関し仰渡されたる書付、史料集六七七頁

(3) 史料集七〇四頁

(4) 同一一四五頁

(5) 同九〇五頁

(6) 同七〇九頁及び七五五頁

(7) 嘉永四年薩摩行仲間より富山反魂丹方役所宛の差留による御役金免除の願書の一節に「御製薬御弘方に付、私共義雇下の由御願に相成候故、御辞退申上候処御聞濟にも不相成……達而御辞退も難申上、且は跡取繕方の助縁にも相成可申と御請申……」（七二八頁）そして翌年富山売薬人より木村宛書状に「就右御給料等被下置」（史料集七三四頁）とある。

(8) 史料集一九六七頁

(9) 同一〇六〇頁

(10) 同一〇二七頁

(11) 同一二二頁

(12) 同一二八頁

(13) 同一九六八頁

植村・領域経済における封鎖性と開放性

(14) 同二三四頁、嘉永四年には、この負担金過重のため薩摩行仲間共より富山藩に上納免除願が提出された。

(15) 同七八八頁

(16) 同八五三頁

(17) 同一九九頁

(18) 文政年間津山領向寄示談、一八七頁

(19) 同七〇三頁

(20) 西岡健、出雪大社の御師（神道学第七号、昭和二十九年）

(21) 同三〇二頁

(22) 同八四四頁

(23) 同一九六七頁

(24) 同一九六九頁